



## 大八洲開拓史の刊行に寄せて

茨城県知事 岩 上 二 郎

今年の八月のある日、大八洲開拓農業協同組合長の佐藤孝治君が、大きな風呂敷包みをかかえて、知事室に現われた。そして渡満以来の大八洲開拓の歴史の発刊を企図したので、序文を寄せてほしいとの依頼を受けた。

私は、目の前に山と積まれた資料と、東北なまりで、とつとつと依頼される佐藤君の日焼けした彫りの深い顔を見ながらその情熱に打たれて快諾した。

しかしながら、知事という激務の中では持参された多くの資料を読むということは、不可能に近い。しかも、私と佐藤君との交遊は私が知事に就任してからのことで、まして満洲時代の模様などは知る由もない。そこで、佐藤君や組合員のみなさんを通じて知り得たこと、あるいは感じたことを記して責を果たしたい。

大八洲開拓団員とともに、あらゆる辛酸をなめて、昭和二十一年九月に満洲から引揚げ、同年十一月当時の北相馬郡菅生村及び大井沢村に入植、大八洲帰農組合を結成し、開拓農業に従事されたが、同地は、利根・鬼怒の両河川の三角地帯で、いわゆる遊水地と称される低湿地である。せつかく植えつけた水稲もわずかの増水で水没し、ある年のごときは、六回も田植えを行ない、またある年は、刈り取り寸前の水稲が一瞬の間に流失するなどの災害が連年相つぎ、全員数日の間は、米はおろか麦さえも口にすることができなかつたと、当時の思いを淡々と語る佐藤君、そして組合員全部が、満洲から今日まで、私を信じてついてきてくれたおかげですと感謝の気持ちを訴えるときの佐藤君、私は、この時ほど、農業者

# 創志

昭和四十八年  
八月

佐藤君  
君とこれ

というものをうらやましく感じたことはない。みんなが信じあい、協力しあうということが、どんなに美しく映ったことでしょうか。

現在、大八洲開拓の青年たちに、明日の農業にかがやく瞳ひびきを見、眼下にはてしなく黄金に波うつ耕地に接したとき、二十数年前だれが今日の大八洲を予想し得たであろうか。

開拓史という冊子に秘められた血と汗と、涙と闘魂が、そのまま、この大地にとけこんでいる想いにおそわれる。

おそらく佐藤君が、この開拓史の編さんを思い立ったゆえんのは、大地にとけこんだ自分たちのすべてが、こののち幾世代にわたって生きつづけることを願うことか、あるいはまた、過去の苦難の道のりを記録として、とどめようと念じたものであるのかを知らない。

しかし、私は、そのどちらであっても、それはそれなりに意義があると思う。

大八洲開拓のご苦勞に、重ねて心から敬意を表するとともに、今後の一層のご発展を祈念する。

昭和四十八年十月